

# 論文

## 例外：不調和の調和

鈴木雅光

### 1 はじめに

文法を研究していると、例外という言葉によく出会うが、日常生活でもそうである。最近目にした例をあげると、「例外なき関税撤廃」「海外で何をしても構わないという偏狭な『米国例外主義』が、テロによって一層強まった」「医療支援は…例外措置として認められ…」「くしゃみがかわいい女の子は例外なくかわいい」「脱世襲政治は例外なく推進する」などがある。

例外は文法用語のように思われるが、実は日常語となっている。本稿では、この例外に伴ういくつかの問題を考察する。

### 2 例外のない規則はない

言葉を包括的に支配するのは文法である。しかし文法は規則であるが、融通の利かないものではない。文法に絶えず例外が付きまとうことが、それを証明している。これは文法が完璧ではないことの証拠にもなる。文法が融通の利かないように思えるのは、一部の文法家があくまでも規範に固執しようとするから、そう見えるだけである。

文法はある用法を「普通（一般に）～である」と説明する。英語の文法書では usually / normally / generally などの副詞を使う。「普通に」というのが、どこまでなら普通なのかという問題はさておいて、これらの副詞の使用が何を意味するのかというと、文法には原則外のものがあることを、明確に認めている、ということを示めている。言語はどのように一般化を行おうが、一般化にはすぐ例外が付きまとう。

Piniker (1995 棕田訳 p. 209) が「それぞれの時代を代表するような優れた英文の書き手もルール破りを犯している。シェークスピアも例外ではない」と述べているように、大作家の文章にも文法に合わない例があることは、我々は読書を通して経験的に知っている。

250年も前に文法書を著したRobert Lowthは、欽定訳聖書、Shakespeare, Sidney, Donne, Milton, Swift, Addison, Popeなどから誤りの例を引いている。Lowthが誤りを指摘したSwiftは、英語が乱れていると大いに嘆いた作家でもあった。Maughamは*The Summing Up*で、Henry Jamesのような注意深い作家でも、学校の先生が見つけたら怒るであろう非文法的な書き方をした、と書き記している。このようにどんな作家にも探せば、文法に違反する例があるのである。

「例外のない規則はない」(No rule without exception) や「どんな規則にも例外はある」(There're exceptions to every rule) という cliché があるが、これは規則には常に例外が存在する、ということを満天下に示している。

文法の数だけ例外があり、文法と例外は切っても切れない関係にある。例外のない文法はないのである。では両者は対等の関係かというとして決してそうではない。後述するが、例外が成立するためには、例外例が少ないことが必要である。つまり、文法通りの例と文法をはみ出す例外を、頻度の点から言えば、例外の方は頻度数がずっと低いことになるのである。

Chomsky (1965: 218) は「文法の一般規則は例外の存在によって価値を失うものではない」(... the general rules of a grammar are not invalidated by the existence of exceptions.) と述べているが、これは頻度的には低い割合で現れる例外の性質を考慮した上で、原則や規則はゆるぎないと主張しているのと同じである。Chomskyはさらに続けて「特殊なものや例外の発見は、一般的には、努力するだけの価値のないものであり、それ自体、当該言語の文法構造の研究に重要性はほとんどない」(... the discovery of peculiarities and exceptions is generally so unrewarding and, in itself, has so little importance

for the study of the grammatical structure of the language in question, ...) と言いつ切っているが、この主張は例外に対して、重きをおいていないことを示す見解でもある。例外が周辺的なものとして無視され、文法研究の中心的な組上に載せられて来なかったのは、恐らく上のような主張があったからである。しかし、例外は文法の規則化を阻止するものではないが、例外は文法において、その存在は決して希薄ではない。

「どんな規則にも例外はある」という決まり文句は、例外がたくさんあるということではなく、頻度数が高い例外あるいは低い例外というように、例外の現れ方に程度問題があると解釈した方がよい。なぜなら規則にはきつい規則もあればゆるい規則もあるからである。そしてどちらの規則にしても例外が付きまとうので、「例外のない規則はある」とは決して言えないのである。

規則がゆるい場合に現れる例外を「弱い例外」、規則がきつい場合に現れる例外を「強い例外」と呼ぶことができるだろう。例外としては強い例外の方が弱い例外よりも例外度が完成している。例外度は例外の成立要件によって異なってくる。「唯一の例外は…」という使い方が例外度が一番強い。「二三の例外を除けば…」というのが次に続く。しかしこれ以上の例外が存在するののかというと、後述するが、例外の性質を考えるとまず考えられない。従って、例外の成立は例外例が少ないことを前提とすることになる。そうすると、例外を強弱で区別してみたものの、強い例外と弱い例外では大差がないということになるが、しかしこの差は例外にとって大きいのである。

### 3 例外が成り立つための条件

例外がたくさんあれば、それはもはや例外とは言えないだろう。では、例外はいくつまでなら例外でありえるのか。本節では、例外が成り立つための条件を考えてみたい。

### 3.1 例外はどうしても生じる

例外はなぜ生じるのか。例外というはみ出しは、どこの世界にもあると言ってしまうは、達観しているように思えるが、例外の生じる原因を何ら説明していない。言語に純正は存在しない。というよりは、純正であり続けることは不可能である。不純なものが混ざる要素が言語にはある。物質と同じで、不純物が混ざるのである。これには、時代の変化、流行、話し言葉の相違などが影響する。

また言葉を使う人間の言語能力が一様なものではなく、バラツキがあることも影響する。教養の高い言語能力を持つ者もいれば、小学生程度の能力しか持たない者もある。そこに観察されるのは、変種 (variety) という術語で、我々にしばしば話題を提供する語法の変種 (usage variation) である。そして大概是、標準を基準に、それ以外のものを品のない言葉遣いとして処理する。品のない言葉の中には、例外として扱われるものもある。例外にも変種は存在するからである。

このようなこと以外にも例外は生じる。どうしても生じるのである。正に「例外のない規則はない」のである。原則、規格、基準を決めるから例外が生じる。逆に言えば、原則がなければ例外は生じない。だが、実際は、人間の言葉は、適切である／適切でない、妥当である／妥当でない、あるいは正しい／正しくないという判断を下される特徴がある。なぜこのような特徴があるのであろうか。それは、言葉は一種の社会的ルールであり、社会を安定させ、維持するために必要なものだからである。例えば、教育の言語が、地域社会によってまちまちであったら、平準化した社会の安定的存立は望めないであろう。

しかし、ルールがあれば、それに皆従うのかというとそうではない。そこにはどうしてもはみ出しが出てくる。人間の作ったルールで絶対的なものはない。犯されることのない神聖なルールは、理念としてあったとしても、実際面ではまずない。

### 3.2 例外の例は少ないほどよい

文法の規則は「普通（一般に）～である」式に説明されるが、これは文法に原則外のものがあることを明確に認めていることを示していると2節で触れたが、ここで「普通」と「例外」はどの程度のことをいうのだろうかという疑問が生じる。

I usually get up early in the morning, but Sunday is an exception.

（普通は朝早く起きるが、日曜日は例外だ）

この例では、1週間は7日であるから、「普通」は6日を示し、「例外」は1日だけとなる。従って、例外日を除いたものが「普通（usually）」の意味しているものと考えられる。以下の例は、すべての中の1人（1つ）だけ「例外」のケースであるので、「普通」とは例外を除いたものと見なされる。

I thought your family were all hard workers, but you're an exception.

（君の家族は皆勤勉な人だと思っていたが、君は例外だ）

The family are all tall with the exception of Tom.

（その一家はトムを除いては全員背が高い）

I don't drink, but today is an exception.

（私は酒を飲まないが、今日は別だ）

例外は1つ以上のこともあるが、少数を前提とする。例外が多いようでは、それは例外と言わない。従って、「それは例外中の例外である」のような使い方が、例外を表すには最もふさわしい。また、「一つの例外を除いては…」 「二三の例外を除いては…」 というような表現も適切であるが、「例外の五つ目は…」 「七八の例外を除いては…」 とは言わないだろう。例外が多すぎては例外と言わないからである。次の例が示すように、例外は3つくらいが妥当と思われる。それ以上だと例外と相性が悪くなる。

There are three exceptions to this rule.

(この規則には例外が3つある)

何事にも例外というものがありますよね。麻雀の点数計算にも3つだけ例外があります。…1つ目の例外ですが、…。2つ目の例外は…。最後の、3つ目の例外ですが、…。(インターネット)

ちなみにGoogleで「4つ目の例外」を検索すると、「著作権侵害の4つの例外規定は…」というような例が4件あった。「5つ目の例外」は0件、これ以上の数字を入れても例は検出されなかった。

以下のような「たった一人例外として」「二つの例外を除けば」「二三の例外を除いて」「わずかの例外については」「少数の例外」などの表現が示すように、例外は少数である。多数の例外は例外ではない。例外も過ぎれば、例外にはならないのである。

市河博士の『英語学—研究と文献』の目次に並んでいる学者の名前はすべて外国人であるが、たった一人例外として細江逸記博士が日本人学者として登場している。(『英語教育』2011年7月号 p. 57)

自然科学におけるガリレオ革命とその理論的帰結は、おそらく唯一の例外なんです。(チョムスキー 福井・辻子訳『生成文法の企て』p. 176)

この二つの例外を除けば、小説家を職業とするようになった十年間に私の書いた本は、… (モーム 行方訳『サミング・アップ』p. 200)

かくしてさんざん悩んだあげく、二三の例外を除いて、『言語学大辞典』に記載されている言語名を採用することにした。(アジェージュ 糟谷

訳『絶滅していく言語を救うために』 p. 381)

例外が認められる態様（場合）は、以下の3つである。（特許法第30条  
インターネット）

わずかの例外についてはすぐ後で述べる。－（ブルームフィールド 三  
宅・日野訳『言語』 p. 2)

…ジェフリー・ナンバークなど、少数の例外はいるものの、アメリカの  
言語学者の大半は、この分野を自称指南役たちに任せてきた。（Pinker  
棟田訳『言語を生み出す本能（下）』 p. 248)

…という規則に対する少数例外中の一つとして挙げられたにすぎない  
が、…（イエスペルセン 半田訳『文法の原理』 p. 18)

彼の目に触れた例外が極めて少なかったことは、…（渡部『英文法史』 p.  
110)

残念ながらその構造主義で統語論が発展することは、ごく一部の例外を  
除いては、ついぞありませんでした。（町田『チョムスキー入門』 p. 18)

次の例のように「多数の例外」という言い方がある。例はインターネットより。

具体的な説明や、多数の例外などは原著を参照してください。

一度に多数の例外が発生しました。

但し組織には「ヒラメ」と呼ばれる多数の例外的存在がある。

例外は少数を前提とするのであるから、例外の性質を考えれば、「多数の例外」はありえないと思われる。例外の多さは規則の存在を危うくする。少ない例外があつてこそ、規則は引き立つのであるからである。

Googleで「多数の例外」を検索すると1,680,000件ある。しかし、「多数の例外」の意味するものは、バラバラの例外として現れるのではなく、一種類の例外が束になって現れるという意味と解釈すべきであり、文字通りの「多数」ではない。もし多数の例外がバラバラに多く現れるならば、それはもはや例外ではなくなってしまう。

### 3.3 例外は特別に認められることがある

例外は、どちらかと言うと、認められない傾向にある。一般化の障害になるからである。しかし、以下の例のように、例外が例外的に認められる場合がある。

…患者の声に背中を押され、実際には例外的に認める範囲が広がっている。(朝日新聞2011年10月26日)

ただ、無人機とは別に、大使が日本側に申し出た医療支援は、宮城県三陸町で例外措置として認められ、…(朝日新聞2012年8月20日)

例外はどうしても現れるのだが、一般的には、例外を認めたくないとき、窮余の一策的に認めることがある。このような場合、「今回限り許す」「今回に限り特別に認める」「今度だけは黙認だ」などは、よく使われる表現である。これらは例外を許す表現である。混乱を説明できない、物事を解決できない、あるいは処理が難しいなどの理由から、例外が許されるので



ある。それは抜け道を許さず、純度を守るために仕方なくという窮余の一策的措置である。上の例のように「例外的に認める」という表現で現れる。

次の例が示すように、「合理的な理由」があれば例外が認められることがある。例外にはその存在理由があるのである。しかし、これも窮余の一策的措置である。

募集・採用における年齢制限は禁止されますが、合理的な理由があって例外的に年齢制限が認められる場合（以下、「例外事由」という。）を厚生労働省で定めています。（インターネット）

「～については例外は認めない」という表現をよく耳にするが、表現上はそうすることが可能であるにしても、これらの表現の裏には、結局、例外の存在は認めているということになる。例外を認めると厄介な問題が生じるので、建前上、そのような言い回しを使っているにすぎないのである。例外の排除は容易ではない。

### 3.4 「例外なく…」というように例外を認めないこともある

「例外なく…」という表現は、例外の例はないということであるから、どんな規則にも例外はある、という例外の特徴に反するものである。例えば以下のような例である。

それぞれの時代を代表するような優れた英文の書き手もルール破りを犯している。シェークスピアも例外ではないし、…。(Pinker 椋田訳『言語を生み出す本能（下）』p. 209)

この例から推測される意味は、英文の書き手は皆、例外なくルール破りを犯していて、ルールなどを守る書き手は例外なくいないということに

なる。

(Pinker 棕田訳『言語を生み出す本能 (下)』p. 209)

70年代に入って、各地の原発建設は例外なく、地元住民の反対にあった。  
(朝日新聞2011年12月9日)

年末、帰省する孫を駅頭で出迎える祖父母の頬は例外なく、緩んでいた。未来を背負う子どもは理屈抜きにまぶしく、いとおしい。(河北新報2012年1月10日)

この上演では、誰もが——一人の例外もなく——たえず誰かに監視されていた。(『文芸読本 シェイクスピア』p. 92)

言語学の世界では、今のところ誰もが必ず使わなければならない理論的道具立てというようなものはありません。生成文法とて例外ではなく、言語学者なら誰もが生成文法の方法で研究を行っているなどということ  
は決してありません。(町田『チョムスキー入門』p. 6)

最初の例は、誰もがルール破りを犯す、シェイクスピアもだ、ここには一切例外はない、という意味である。ここでは「例外のない原則はある」という公式を作ることになる。このような例外の存在を一切排除する表現は、規則には例外がつきまとう、と先に述べたことに反するが、例外の例外と考えれば、例外にも例外があるということになる。

#### 4 例外は日常的である

文法辞典には、語法 (usage) や誤用 (misusage) の項目は載っているが、例外 (exception) という項目は載っていない。当たり前すぎて載っていない

いのであろうか。決してそうではない。例外は文法事項ではないのである。例えば、時制 (tense) や相 (aspect) や態 (voice) は、言語に属する文法項目であり、まず言語以外の分野で、時制、相、態が議論されることはないであろう。しかし、例外は言語のみならず、法律にも校則にも社則にも、取り決めのあるところにはいつも現れ、以下の例が示すように、言語の領域のみで論じられる項目ではない。4～6 番目の例はインターネットより。

本書の無断複写 (コピー) は、著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。(Pinker 棕田訳)

東京メトロは15日、7月からの節電対策として、正午～午後3時に大半の駅の冷房を止めることを明らかにした。秋葉原駅や市ヶ谷駅など利用客の多い約40駅については、例外的に停止時間を半分の1時間半にする。(朝日新聞 2011年6月16日)

唯一の例外は石橋幸太郎先生が…コメントされたものがあるだけだった。(『渡部昇一小論集成 上巻』 p. 255)

勝手な「線引き」せず例外なく賠償を：福島原発事故損害賠償「1次指針」

網地島も例外なく被害は甚大です。

北海道も例外なく放射性物質の汚染は進む。

日常でも、あることが述べられた後で「しかし、M9の地震は…」 「ただし、妻には…」 などというように、例外を付け加える言い回し (=例外表現) をよく耳にする。日常よく耳にするのは、文法を論じる場合にのみ登場す

る専門用語ではないからである。専門用語は限られた範囲でしか流通していないので、どこでも耳にするというわけにはいかない。従って、どこにもある例外という語は、文法事項ではないのであり、単なる辞書的な語彙項目にすぎない。例外は一部の専門領域で使用される術語ではなく、広範に使われている項目なのである。

Fowlerの*A Dictionary of Modern English Usage*を調べてみると、exceptionの項目は載っているが、*The exception proves the rule*という言い回しは、議論で使われるがどういった意味で使われるのかを説明したもので、語法的な扱いで載っているのではない。

## 5 例外は周辺的な問題ではない

例外を観察してみると、例外は文法と同じように、無秩序に生じているのではなく、生じるにも法則性があるということが分かる<sup>(1)</sup>。このことを考えると、例外に価値がないとは決して言えない。また、日常的である例外を周辺的な問題と片付けるのはどうであろうか。もし周辺的な問題ならば、なぜこうも例外が頻発することをどう扱うのであろうか。

それはさておき、言語の問題を扱うとき、例外は文法事項であるようにも思える。例外を言語上の術語として認めるべきではないか。その理由は、正用との比較で誤用が問題となるが、誤用は例外の一範疇だからである。また、例外にも生じるには原因があり、例外は文法と同じように規則化できる場合が多い。例外を規則化すれば、文法規則と並ぶ規則を作ることが可能である。例外を言語上の術語として認めるならば、例外が周辺的な問題だと無視されることは少なくなるのではないか。

例外は、言語の領域では、周辺的な問題としてあまり重要視されていないが、意味や構造上の特異な振る舞いをする慣用句の場合、大塚・中島監修『新英語学辞典』（1982: 548）は、次のように述べて例外の価値を認めている。

イディオムの領域は、通例の言語理論で言及されているものよりはずっと広範なもので、単なる例外として扱われるべきものではなく、文法理論の中に正当に位置づけられるべきものである。異なる文法理論の力量を比較する際に、イディオムの取り扱い能力が、試金石の一つとされることもある。

テイラー・瀬戸（2008: 351）も「これらの構文（＝構文的イディオム）を簡単に周辺に追いやることはできない。中心的だと思える構文と明確に区別する合理的な理由が見つからないからである」と同じ様なことを述べている。

イディオムすなわち慣用句は、非文法的、非論理的な表現が多く、単なる例外と言って片付けられないことが多いのである<sup>(2)</sup>。

周辺的な現象として扱われていたものが、中心的現象に変わることがある。例えば、かつて生成文法では、メタファーを周辺的な問題として、ほとんど顧みなかったが、今日ではメタファーは言語と思考の中心にあるという説が一般的となっている<sup>(3)</sup>。

## 6 例外は不調和の調和である

文法と例外は相反するものとして存在しているように思えるが、対立するものではない。文法を調和に喩えるなら、例外は不調和に喩えられよう。そして例外は不思議なことに、不調和の調和として存在しているのである。それは文法が内に秘めた規則性から発生してくるのと同様に、例外も内部から生じる規則性があるという共通性が、不調和の調和を演じているものと思われる。

それでは文法であれ例外であれ、内に秘めたる規則性あるいは内部の規則性とはどういうものか。これを説明する役割を演じるのが文法家であるが、例外の規則性は文法の規則性に比べて、ほとんど説明されていない。

例外は何に基づけば、もっとうまく説明できるのかを筆者は追究しているのだが、今のところ合理的な説明には至っていない。

Chomskyは、伝統文法家のJespersenやPoutsmaは、規則的な構造についての一般化は、例を与えてヒントや注意書きを与えているにすぎないが、「例外や不規則についての記述は十分に与えている」と述べているが<sup>(4)</sup>、彼らの例外の扱いは、体系的というよりも散発的である。従って、例外研究は、ほとんど手つかずの状態にあると言ってもよい。

その理由として、冒頭で引用したように、例外の研究は努力するだけの価値のないものであり、文法構造の研究に重要性はないとChomskyが述べているようなことがあげられる。周辺のなものは言語の中核をなさない、という考えはこの派の文法家やChomskyが繰り返し述べていることでもある<sup>(5)</sup>。

しかし、果たしてそうだろうか。核心を片付ければ、今度は、周辺の問題が浮上することがよくある。周辺のなものが核心を悩まし、周辺を解決しないと核心の問題が進まないのである。それほど周辺の問題は核心的な問題なのである。このように、核心と周辺は相互に何か関係のある糸で結び付いているように思える。従って、周辺のなもの、例外的なものは無視すべき問題ではなく、むしろ言語研究に大きな示唆を与えてくれる材料と解すべきであろう。小異を捨てて大同につけと言うが、言語研究にはこのようなことは当てはまらない。

例外を無視する文法は、文法に完璧さを追い求めてはいないだろうか。しかし、完璧な文法というものはこれまであった試しがない。人工的に作り上げた言語なら、もしかしたらそういうものが可能かもしれないが、少なくとも人間の使う言語に、完璧な文法の構築はできないのではなかろうか。やはり文法は不調和の調和（＝例外）を考えながら、構築されるものが一番よい文法であろうと思う。1足す1が必ずしも2にならないのが言葉であり、1.5にも3にもなるのが言葉だからである。

## 7 まとめ

本稿は、例外に伴ういくつかの問題を指摘し考察した。述べたことをまとめると次のようになる。

- ①「例外のない原則はない」と言うように、例外はどうしても生じるものである。
- ②例外が成り立つための条件として、「唯一の例外」「二三の例外を除いて」などの表現が示すように、例外の数は少ないほどよい。例外が多すぎるとは例外と言わないからである。
- ③「多数の例外」という言い方があるが、これはバラバラの例外として現れるのではなく、一種類の例外が束になって現れるということであり、文字通りの「多数」ではない。
- ④例外は特別に認められることがある。物事の窮余の一策的な解決を計る場合に認められる。
- ⑤「例外なく…」というように例外の存在を一切排除する場合もある。
- ⑥例外は言語の領域のみで論じられる項目ではなく、日常的な表現である。
- ⑦言語においては例外は周辺的な問題として扱われている。しかし、言語においては、例外は言語上の術語として認めるべきではないか。これにより、例外は無視されることはなく、周辺的な問題ではなくなるのではないか。
- ⑧文法と例外は対立するものではない。文法を調和に喩えるなら、例外は不調和に喩えられる。しかし、例外は不調和の調和として存在している。従って、文法の規則性の解明と同じように、不調和の調和（＝例外）の解明も必要である。

### (注)

- (1) 鈴木 (1999) 参照。

- (2) 鈴木 (1999: 250-252) 参照。
- (3) テイラー・瀬戸 (2008: 293) 参照。
- (4) 鈴木 (1999: 8) 参照。
- (5) 例えば、Chomsky (2008 大石・豊島訳『自然と言語』 p.197) 参照。

## REFERENCES

- Chomsky, Noam. 1965. *Aspect of the Theory of Syntax*. Mass.: MIT Press.
- \_\_\_\_\_. 2002. *On Nature and Language*. 大石正幸・豊島孝之訳『自然と言語』研究社, 2008.
- 大塚高信・中島文雄監修. 1982. 『新英語学辞典』. 研究社.
- Pinker, Steven. 1994. 椋田直子訳『言語を生み出す本能 (下)』日本放送出版協会, 1995.
- 鈴木雅光. 1999. 『例外の文法』. 東京精文館.
- Taylor, John (ジョン・テイラー)・瀬戸賢一. 2008. 『認知文法のエッセンス』. 大修館書店.